



## 警戒区域 狭いのか広過ぎるのか？

藤井 恭一

大和徳洲会病院 放射線科

福島原子力発電所の事故で、30km 半径内が汚染区域と認定されている根拠を、誰が提供したのだろうか。単なる炉心の温度が上昇して発生した水素が爆発し炉心内の放射性物質が撒布されただけなのに、専門と自称なさる東工大出身の総理は、広島、長崎の原爆のことが思い浮かべられたのかもしれないが、核分裂と違って、炉心内水素ガスの爆発による炉心内放射性物質の撒布が、そんなに怖いものとは知りませんでした。広島、長崎での原爆の爆発は、500m 以上の高度で起ったが、被害は3～4km 以内の木造構造、ビルの内部の火災が起っています。直径1km 内の地上にいた人間は全員即死、2km までは爆風で飛ばされ、露出した皮膚はIII 度以上の火傷（ケロイドの残る）で殆ど即死に近かった様です。

現在、新聞による10km 半径内の放射線量は、24 時間に換算すると殆ど2mSV を超えていない(新聞の資料をもとに私が1日あたりに計算しました)が、子供達の被曝が問題となっている由です。広島、長崎の被曝者では、年齢による区分けはなく、全体として認定しています。又、両市共に、被曝者認定では爆心地からの距離については、当時は全く問題にはなっていなかった。又、広島、長崎での爆発が、地上500m 以上であったのに、水素爆発が地表であったことの違いを、被曝者認定に考慮されていない。

又、認定危険区域内での、人命救助については、全く手つかずで放置されていたのを、米国の兵士達がボランティアで捜査してくれるまでは、危険区域内であるとして、日本人の救助活動は禁止されていた。被曝について、知識、情報が、全く、広島ではなかったせいでもあるが(当時でも知識が零ではなかったと思うが)、多くの救命施設が、爆心地の1km 以内に原爆投下後2 時間以内に設けられた。

その頃30km 離れた東広島市の寺西国民学校6 年生だった私は、爆発の瞬間教室中が急に明るくな

り、窓から西方広島の方に落下する落下傘が認められ、黒い煙のあと例の原爆雲が認められた。教師も一緒に窓から見ていたが、あのカボチャのような雲を見て、ホッとした様に机についてと命じられた。投下後20 分もしない内に先生から、広島が大変だから、お前達は、家に帰るようにと云われ、何となく授業が休みになって嬉しくなって帰宅した。すると、傷病軍人療養所に勤務していた父も、救護班を引率して広島へ出発したと母が話していた。あとで様子を聞くと、投下後10 分後には、救護班の要請があり、第一班が出発して1 時間後に、兎に角大変だからと、第二班を引率して出発した後だった。その時の救護所は、内部が丸焼けになった、爆心地から約1km の本川小学校であった。3 日後の夜中に、疲れきった仲間の医師を連れて帰宅した。全体で、200 名くらいの職員が救護にあっていたが、当時、広島に救護で出掛けた人達が、原爆症とかその他の病気で亡くなったりした方は、少なくとも昭和50 年(30 年後)にはなかったと父から聞いている。当時42 才だった父の年令からすると救護に当たった職員の方々は、殆ど、父より若かった様である。当時のピラ(米軍が飛行機でバラマイていた)では、原子爆弾を落とすから広島の方は、当日留守にする様という警告があったそうである。

いずれにしても、福島では、30km 半径の人々は緊急避難させられたのが、常識で考えても妙だと思った訳である。この地域に生存者があれば見捨てられたことになる。東海村の事故の時には、被曝された一人が歩いて引き上げているのをTV で見た記憶がある。(この方は亡くなった。)昭和38 年広島での日本放射線影響学会総会で、「大線量照射によるマウスの急性死」の発表をした時、致死線量を照射したマウスの内、麻酔したマウスの死亡までの時間が、他のマウスより長いことを報告した。(日医放会誌25 (1): 30-46,1965)<sup>註</sup>これを中国新聞で「被曝しても安静にしていると生命が助かる」と紙上でとり上げら

れたのを思い出しました。

広島での30km圏は、山陽本線では、東は西広島から西は大竹となるし、長崎では、諫早ということになる。東京駅では横浜、上野からは大宮、博多では東は赤間、西は鳥栖という事になる。

これを指示した人が、30km圏が、実際にどの様な距離を含むのか御存じだったとは思わない。Chernobylの様な、とんでもない田舎のことが頭にあったのかもしれないが、全くおかしいと思わなかったのでしょうか。(被曝者認定は3km以内で被曝又は入市した方々で、現在広島、長崎での被曝者健康手帳を持っている方は、21万9410人である。H23.3月末 朝日新聞)

75年間草木も生えないと云われた広島では、鉄道沿線にしか生えていなかった、荒地野菊(別名鉄道草又は、ペンペン草)が、広島市内、そこら中に繁茂していたのを記憶している。(昭和21年4月)

翌年4月、内部が焼け落ちた、広島高師附属小学校の灰の中で、江波の三菱の寮にあった、長机と長椅子を、荷車で私共が手伝って運び込み、授業を受けた事を思い出しました。

原爆の代名詞にピカドンと言っていたが、私には、音ははっきりしないが、ピカという光の記憶は消えない。核爆発とピカは切っても切れない関係がある。福島での原子力発電所では、ピカはなかった訳です。“原発125個分”などとノタマッタ方は、全くの無智としか云えません。

ピカのない核爆発はないと考えますと北朝鮮の核実験は、ピカがなかった様です。

<sup>註</sup>心電計を装着して照射筒内で照射し死亡まで照射しました。死亡直前に心電図に全身痙攣による筋電図混入を死亡の判定としていました。この痙攣を確認するため、死亡前に照射を中断して観察しました。

ダウンロードされた論文は私的利用のみが許諾されています。公衆への再配布については下記をご覧ください。

### 複写をご希望の方へ

断層映像研究会は、本誌掲載著作物の複写に関する権利を一般社団法人学術著作権協会に委託しております。

本誌に掲載された著作物の複写をご希望の方は、(社)学術著作権協会より許諾を受けて下さい。但し、企業等法人による社内利用目的の複写については、当該企業等法人が社団法人日本複写権センター（(社)学術著作権協会が社内利用目的複写に関する権利を再委託している団体）と包括複写許諾契約を締結している場合にあっては、その必要はございません（社外頒布目的の複写については、許諾が必要です）。

権利委託先 一般社団法人学術著作権協会

〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-41 乃木坂ビル 3F FAX：03-3475-5619 E-mail：info@jaacc.jp

複写以外の許諾（著作物の引用、転載、翻訳等）に関しては、(社)学術著作権協会に委託致しておりません。

直接、断層映像研究会へお問い合わせください

Reprographic Reproduction outside Japan

One of the following procedures is required to copy this work.

1. If you apply for license for copying in a country or region in which JAACC has concluded a bilateral agreement with an RRO (Reproduction Rights Organisation), please apply for the license to the RRO.

Please visit the following URL for the countries and regions in which JAACC has concluded bilateral agreements.

<http://www.jaacc.org/>

2. If you apply for license for copying in a country or region in which JAACC has no bilateral agreement, please apply for the license to JAACC.

For the license for citation, reprint, and/or translation, etc., please contact the right holder directly.

JAACC (Japan Academic Association for Copyright Clearance) is an official member RRO of the IFRRO (International Federation of Reproduction Rights Organisations).

Japan Academic Association for Copyright Clearance (JAACC)

Address 9-6-41 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052 Japan

E-mail info@jaacc.jp Fax: +81-33475-5619